

所 感

一縁缺けて非擇滅となる衆緣具足誠に容易でない。今度三師俱に曆を還すに當り敬祝の議文集の發刊となると衆縁和合の増上、眞に欣懷至極である。藪篠一枝を捧げて祝苑にと存じ乍ら東西巡錫といへば嚴かに聞えるが萍の流れて何の根も種も下すこともできぬのに時間ばかり消えて寄稿締切の時來る。勿卒に題を陳ねて諸學人の一粲に供し、近く宗學振興の礎材の一片と致たい。

(一) 法然上人史の研究は世界に眞の人間宗教發達への大宗教改革として東洋では釋尊に比肩し歐米の改革ルーテル等をはるかに超過することも顯揚して七百五十回忌を迎ふることにして頂きたい。昨年發表した「日本淨土教の中核」などは眞に一毛であるが、讀者は已に宗史相傳にも記傳行儀にも是正すべきもの尠からざるを發見せられたと信ずる。

(二) 淨土教の有する人間社會教の大きな進動は上人の生涯その社會事相に活現したことを基調として駿々展開すべきである。天台の法然が偏依善導となり、圓戒と選念とが念戒一致となるのも、復讐氏争を越えて同得往生一佛淨土となれる史實を明白にせる上に、不退進趣の社會を實現すべく、不安磨擦を脱した善美眞生の文化社會の指導層となるべきである。

(三) 凡入報土を明すために立教開宗を必要としたことを認むると共に凡入報土を實にせる眞佛教社會建設へと邁進すべきであり、内は派閥を止め外は度生へと協力すべきである。學慧は道行に業果は總進へと不斷不退の往

生を完了すべきである。

小西・前田・高島三師の彌健を願ひ表祝諸賢の協賛によりて活淨土學・活佛教界の涌出向上を至念し南無阿彌陀佛し奉る。

四月廿七日

三祖遺跡石見三保極樂寺にて

椎
尾
辨
匡
した
たむ